

カツオ竿釣り漁の初漁期の特徴について

(一社) 漁業情報サービスセンター
生産流通部流通情報グループ

今年のカツオ竿釣り漁は、操業を開始して早くも3ヶ月以上を経過した。近海竿釣り船（中型船）の操業は、1月の初漁以降、小笠原諸島南部水域で行われ、6～12kg級主体の漁獲が4月24日現在でも続いている。例年、4月近くになると伊豆諸島水域にも漁場が形成され、1.5～2kg級のいわゆる「初カツオ」サイズも漁獲され始めるが、今のところ兆候はほとんどない。このように4月に入っても伊豆諸島水域に漁場が形成されず、小笠原諸島水域で3ヶ月以上の長期に渡り、特々大魚主体の漁獲が続くという状況が3年連続で続いている。昨年・一昨年は4月後半になって、ようやく伊豆諸島水域にも漁場が形成された。一方、南西諸島水域（屋久島周辺）でも例年通り操業が行われ、鹿児島や宮崎に水揚げが行われており、1～2kg台のカツオ主体の漁獲が続いており、昨年をやや上回る漁獲状況で推移している。

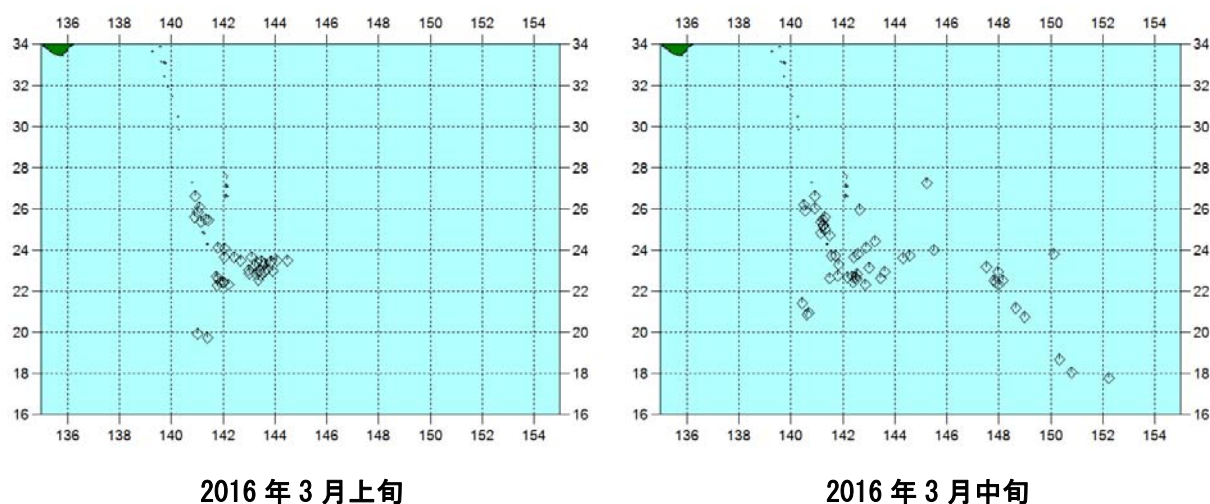
今期の漁況経過と、この時期水揚げの主体となる房州勝浦の水揚げ状況をみてみたい。

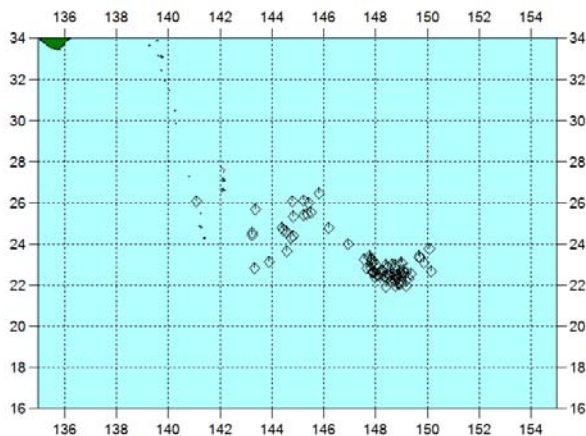
1. 今期の小笠原諸島周辺の漁況経過

今期3月以降の漁況経過を振り返ってみたい。3月上旬は小笠原諸島西側（硫黄列島周辺海域）で延46隻が操業し、1日1隻当たり平均7.1トンの漁獲であった。

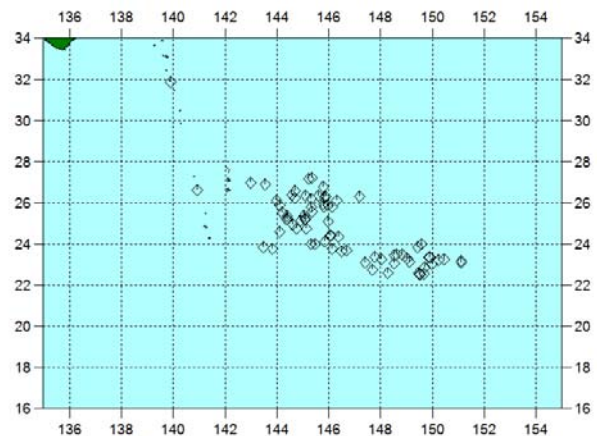
3月中旬は引き続き硫黄列島周辺海域で延40隻が操業したものの平均2.8トンと急激に低調となり、一部の船は小笠原諸島東側に移動した。東経145度以東では延14隻が操業し、平均8.2トンと西側寄りも3倍近く多かった。

図1 中型竿釣りの旬別漁場位置（2016年3月上旬～4月上旬）

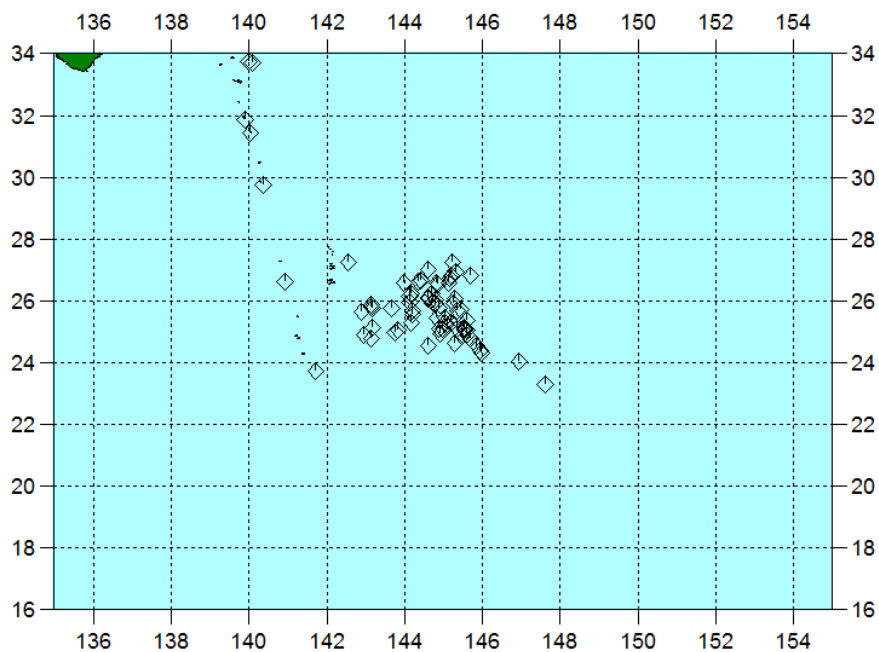




2016 年 3 月下旬



2016 年 4 月上旬



2016 年 4 月中旬

3 月下旬は小笠原諸島東側が主漁場で、①父島～母島東側と②南鳥島（マークス島）南西で操業がみられ、後者に操業が集中した。東経 145 度以西では延 13 隻が操業して平均 5.2 トンの漁獲、東経 145 度以东では延 65 隻が操業して平均 11.1 トンと、西側の倍の漁獲がみられた。

4 月上旬は引き続き小笠原諸島東側が主漁場で、①父島～母島東側と②南鳥島南西で操業し、前者の操業がやや増えた。東経 145 度以西では延 19 隻が操業して平均 5.2 トンの漁獲で前旬並み、東経 145 度以东では延 55 隻が操業して平均 7.2 トンと、東側の漁獲がやや落ちた。

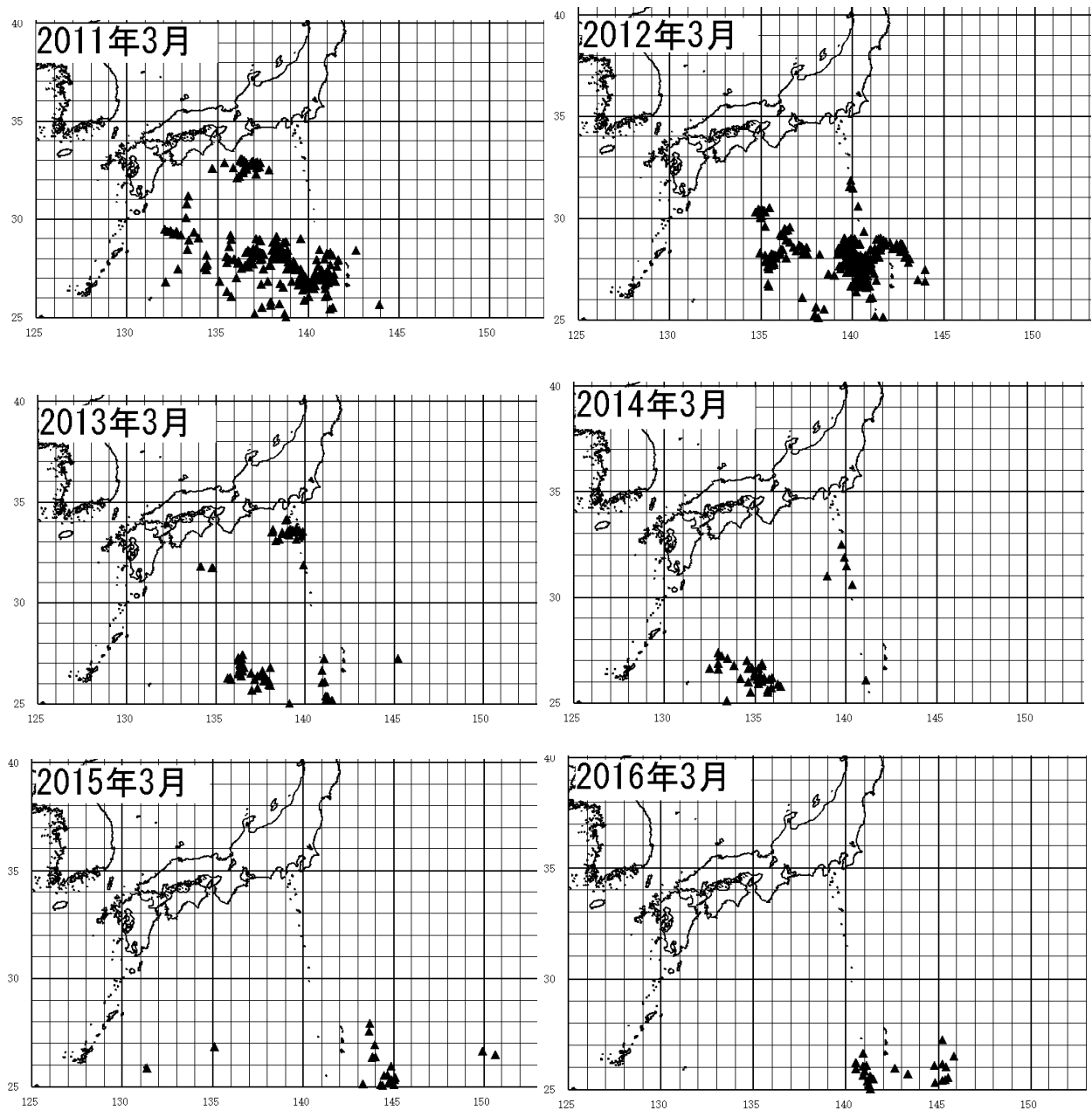
4 月中旬には引き続き小笠原諸島東側が主漁場で、①父島～母島東側と②伊豆諸島八丈島～鳥島でもようやく操業がみられた。東経 145 度以西では延 48 隻が操業して平均 6.8 トンの漁獲で前旬並み、東経 145 度以东では延 30 隻が操業して平均 7.4 トンで前旬並みであった。

なお、3 月上旬～4 月中旬の平均漁場水温は 24 度で変化なく、群の性状は鳥付・餌持ちが多かった。

2. 2011～2016 年における 3 月・4 月上旬の漁場位置の比較

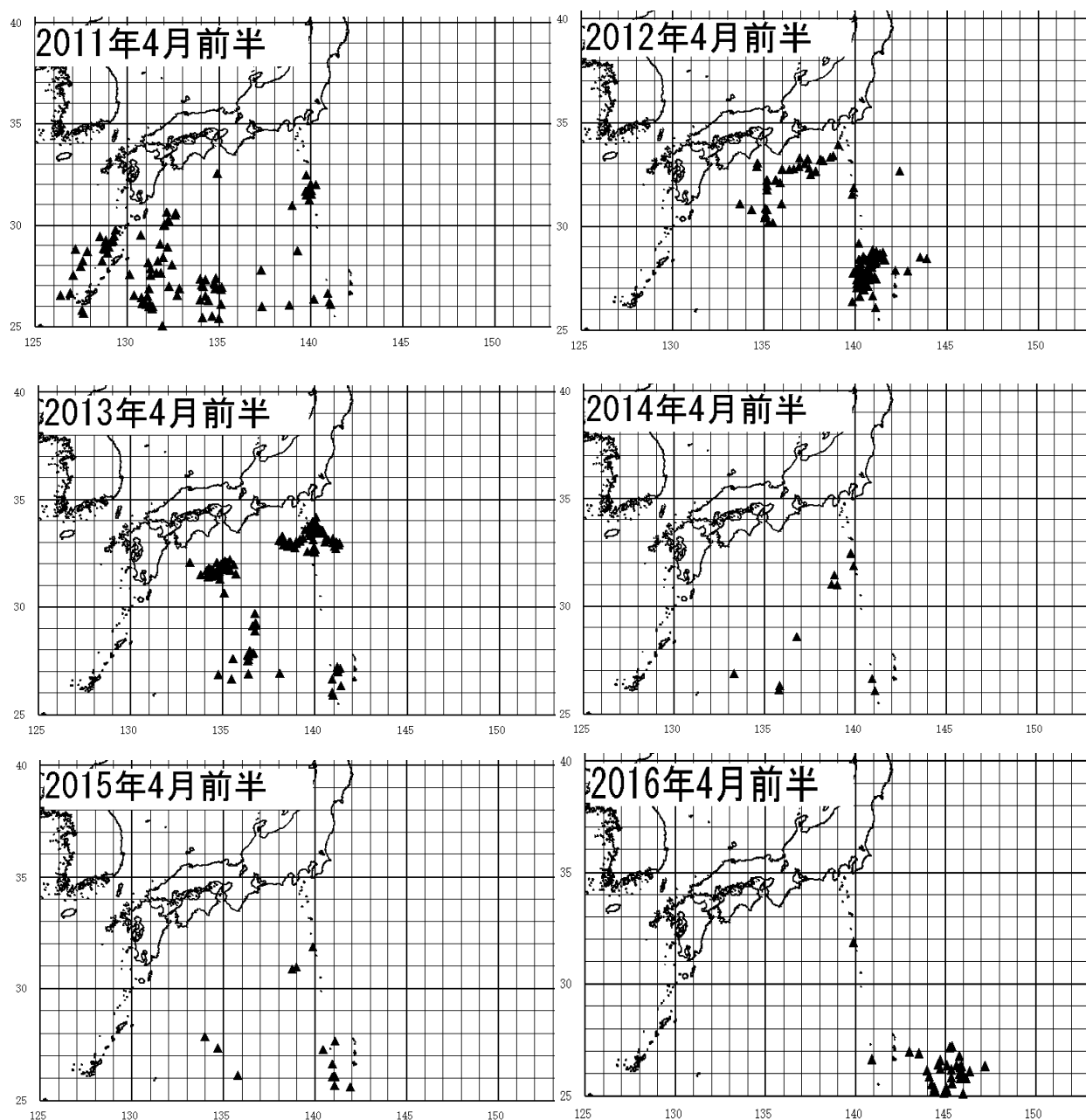
2011～2016 年の 3 月及び 4 月の竿釣り漁船の漁場位置をみてみたい。2011 年 3 月は小笠原諸島北部（西之島～父島・母島）・大東諸島・紀伊半島沿岸にも漁場が形成された。2012 年 3 月は小笠原諸島～大東諸島間に漁場が形成され、伊豆諸島の鳥島近海での操業もみられた。2013 年 3 月は操業隻数が減ったものの小笠原諸島北部（西之島西方）及び伊豆諸島南部（三宅島）で操業がみられた。2014 年 3 月も小笠原諸島北部（西之島西方）及び伊豆諸島南部（鳥島）で操業がみられた。2015 年 3 月・2016 年 3 月は小笠原諸島北部（父島・母島東）に漁場が形成されたものの、伊豆諸島海域には漁場は形成されなかった。

図 2 中型竿釣り船の 3 月中の漁場位置(2011～2016 年)



2011 年 4 月前半は東日本大震災の影響もあり、大東諸島・南西諸島での操業が多く、小笠原諸島での操業は低調であり、八丈島～鳥島間で若干操業がみられた。2012 年 4 月前半は小笠原諸島北部（父島・母島西）のほか、黒潮沿い（高知～紀伊半島～伊豆半島沖）に形成されたほか、八丈島近海に漁場が形成された。2013 年 4 月前半は小笠原諸島北部の操業が低調で、黒潮沿いの高知～紀伊半島沖及び遠州灘～伊豆諸島北部の操業が中心であった。2014 年 4 月前半は記録的な不漁で小笠原諸島北部・伊豆諸島に散発的な操業がみられた。2015 年 4 月前半は小笠原諸島南部主体の操業が続き、小笠原諸島北部・伊豆諸島での操業は低調であった。2016 年 4 月前半は小笠原諸島北部（父島・母島西）に漁場が形成されたものの、伊豆諸島海域には漁場は形成されなかった。

図 3 中型竿釣り船の 4 月前半の漁場位置(2011～2016 年)

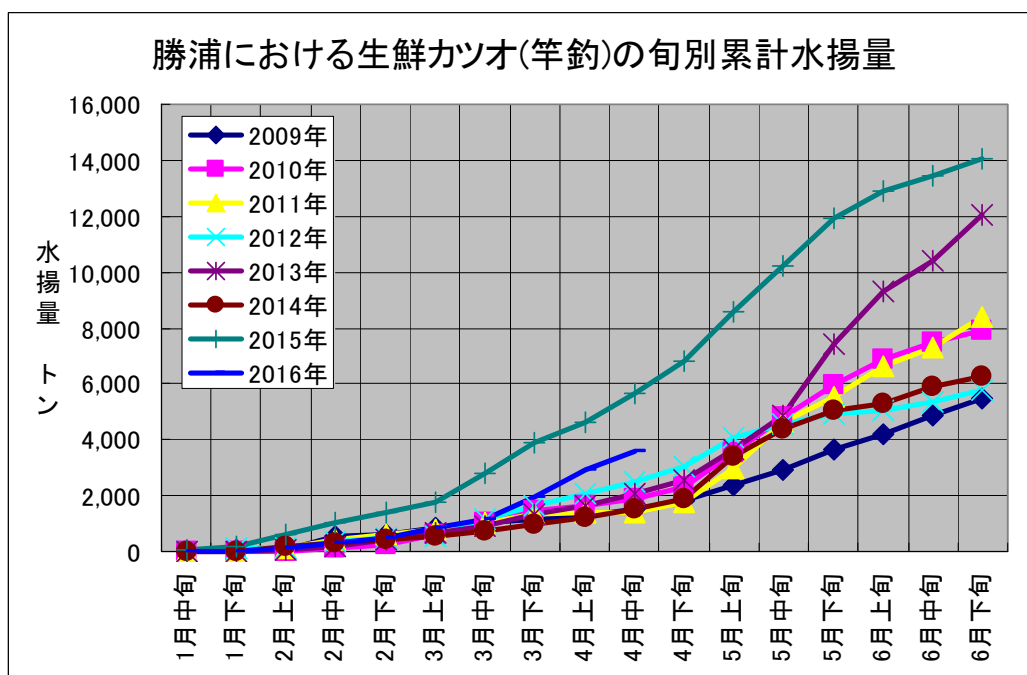
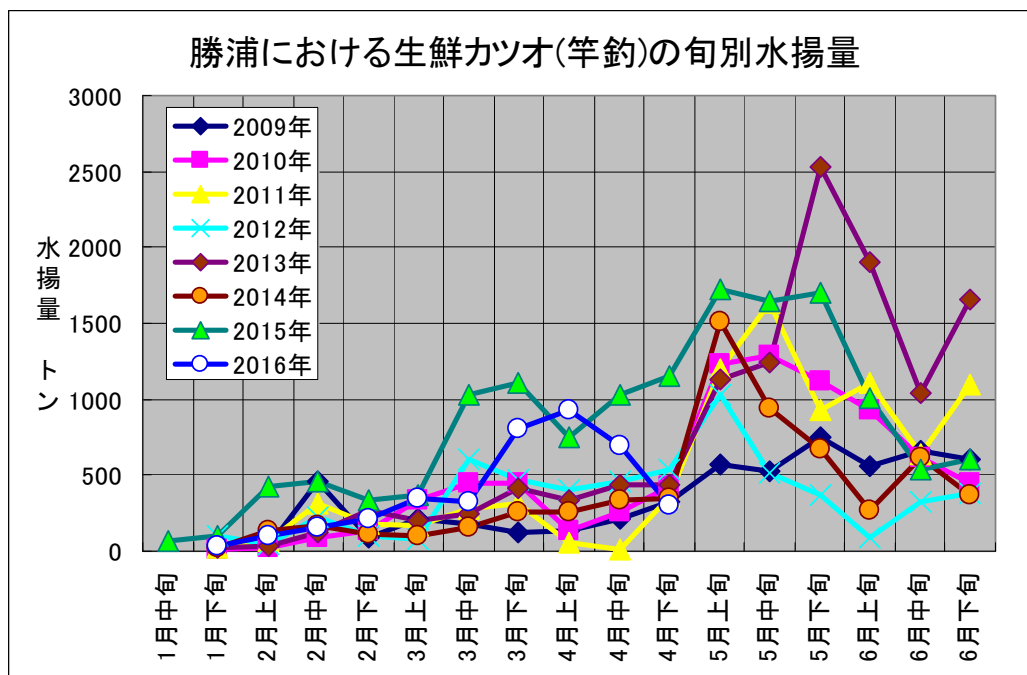


3. 房州勝浦における水揚げ状況

房州勝浦の4月20日までの累計水揚げ量は3,491トンで、前年の5,681トンの半分の61%であった。2009～2014年の4月20日までの累計水揚げ量は1,421～2,501トンで、6年間平均1,820トンであった。今年は昨年の3分の2程度と水揚げは少ないものの、6年平均と比べ、192%と一見良さそうにみえる。

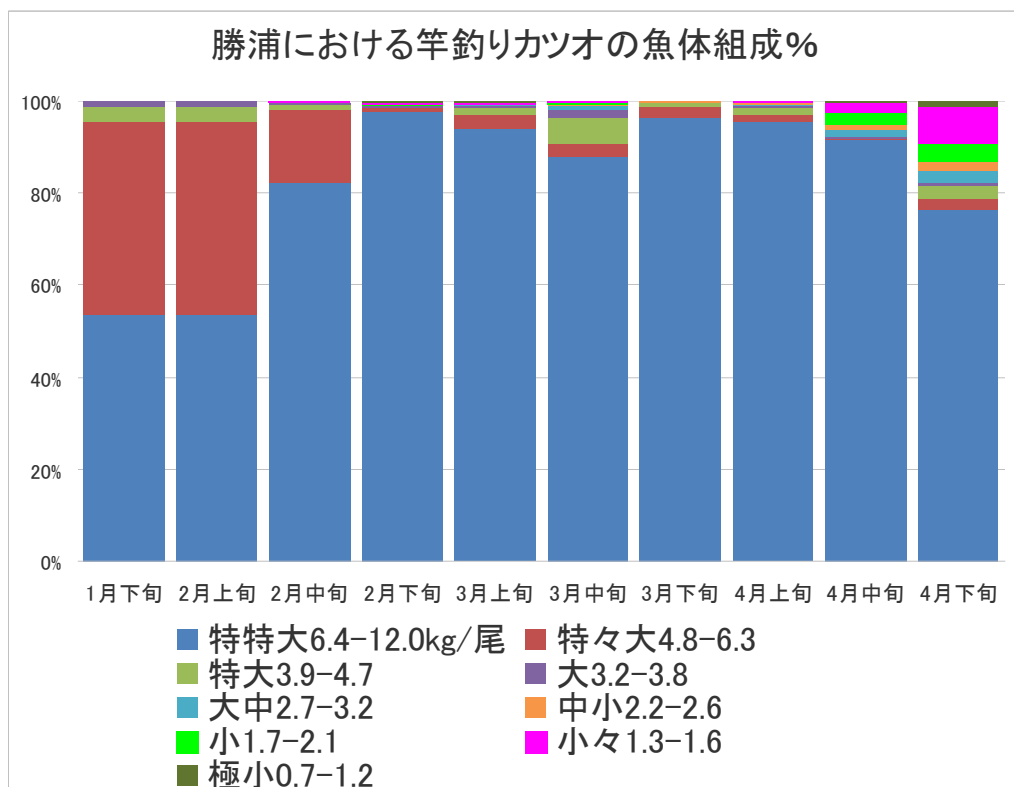
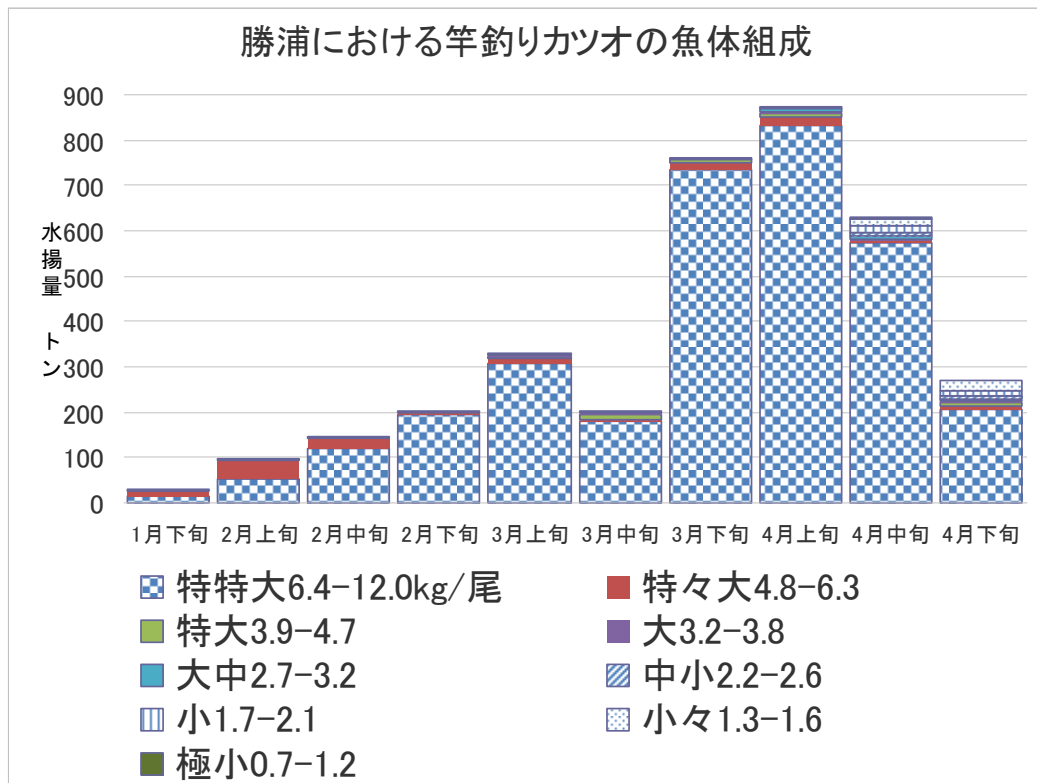
今期の特徴として「特特大」銘柄の1尾6.4～12.0kgが4月下旬になっても獲れており、例年、この時期に加入のある1.5～2kg級がほとんど獲れていない。

図4 房州勝浦における生鮮カツオの旬別水揚げ量



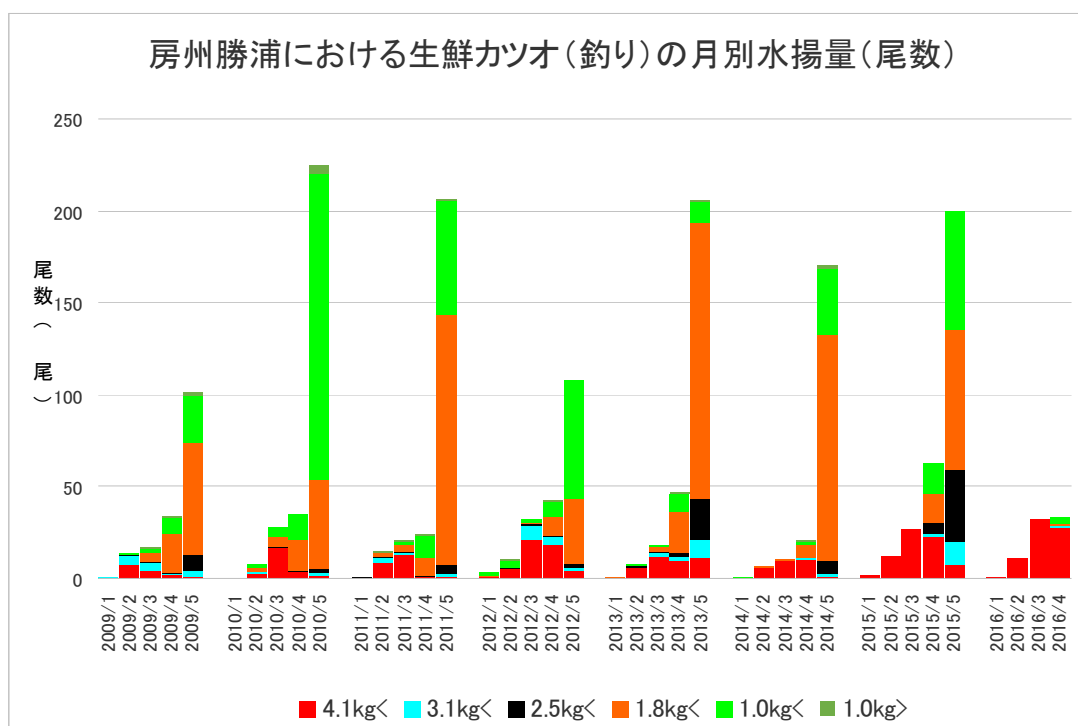
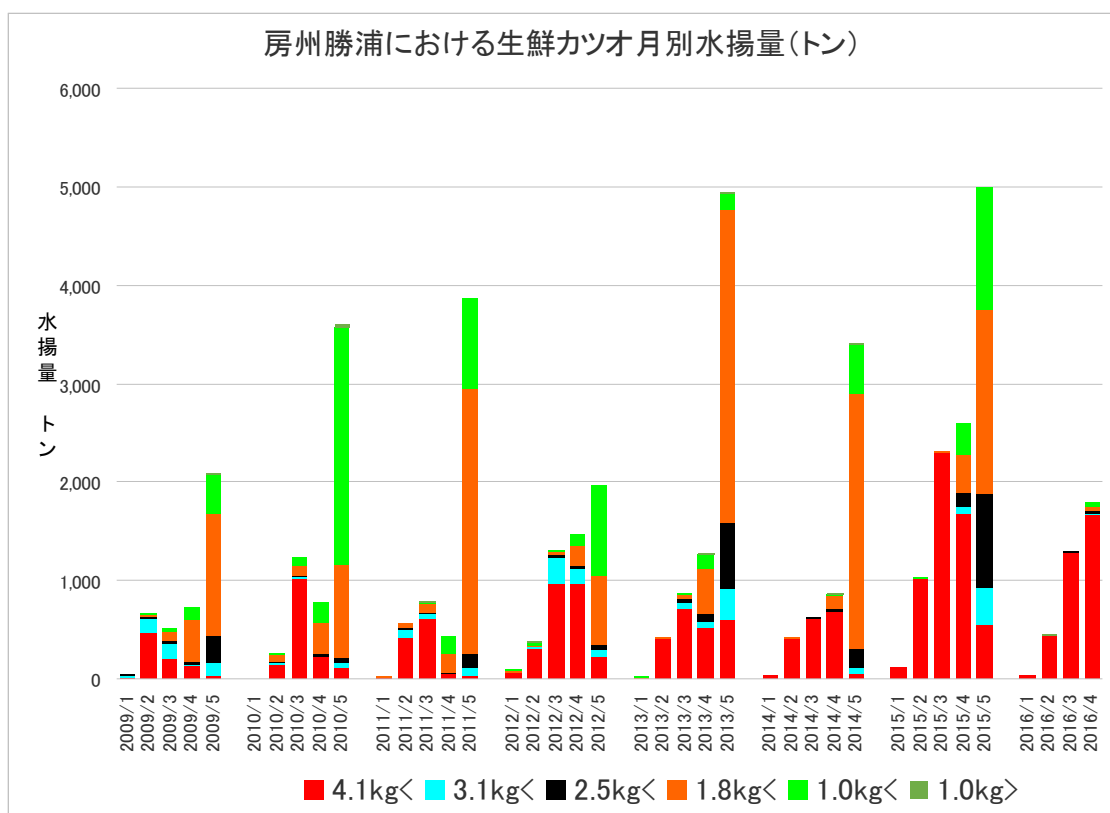
今年は漁獲物の大半が 6～12kg 級で、4 月中～下旬に例年この時期の漁獲の主体となる 1.5kg 級・2.0kg 級の加入が若干みられた。

図 5 房州勝浦における生鮮カツオの旬別魚体組成（4/25 現在）



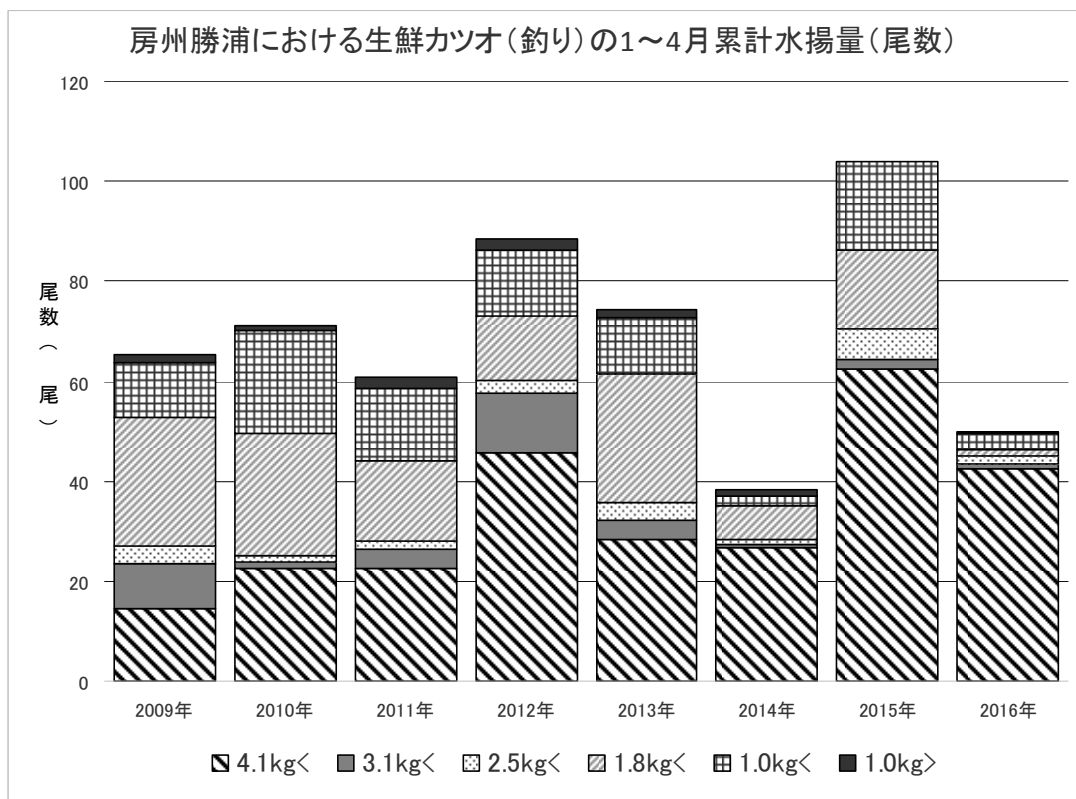
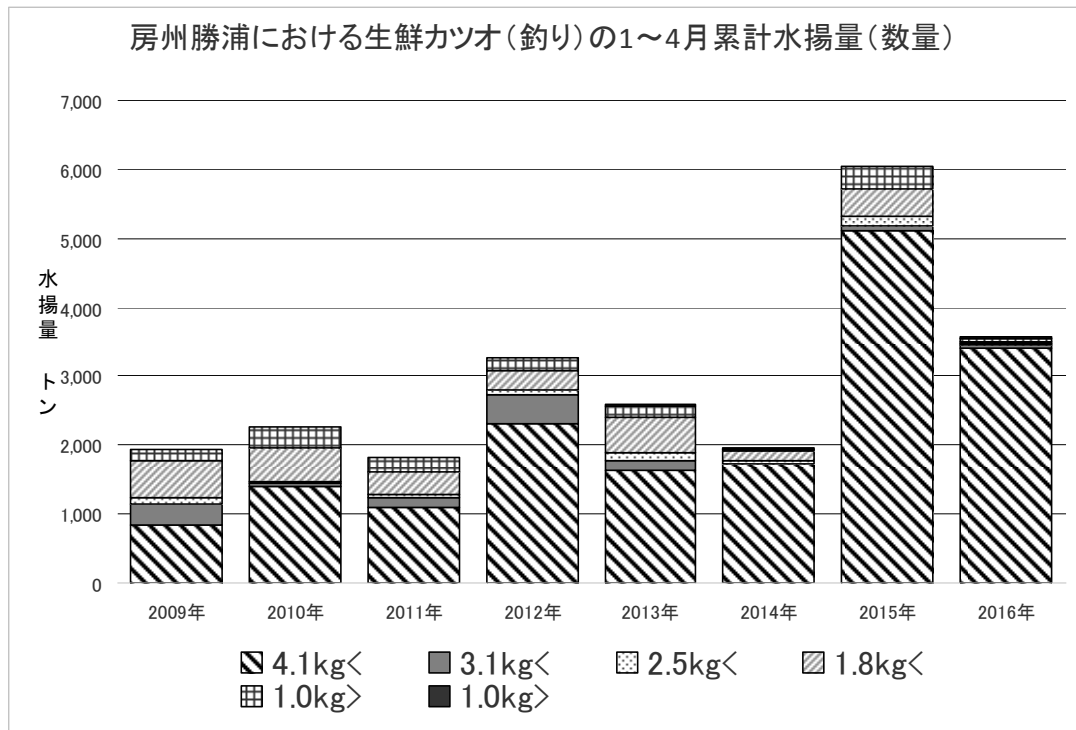
今年は 1.5kg 級・2.0kg 級の加入が悪く、2013 年や 2015 年にあった 2.5kg 級の加入もなく、今のところ 4.1kg 以上（6～12kg 主体）主体の魚体組成となっている。

図 6 房州勝浦における生鮮カツオの月別魚体組成



累計漁獲量では 3500 トンと昨年の 6 千トンには及ばず、2012 年に次ぐ数量となっている。しかし、累計尾数では 50 万尾で昨年の半分、不漁年であった 2014 年に次ぐ水準と少なかったものの、4.1kg 以上は、昨年に次ぐ多さであった。

図 7 房州勝浦における生鮮カツオの累計魚体組成（4/25 現在）



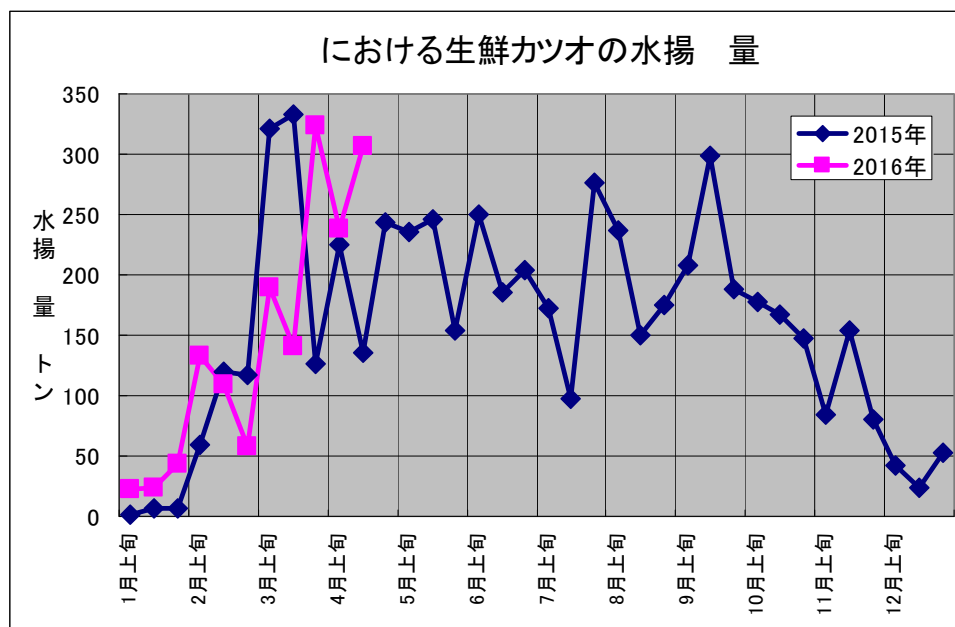
4. 今後の見通し

房州勝浦で水揚げされるサイズは、4月19日までの累計水揚げ量をみると数量ベースで6.4～12.0kg級以上の「特特大」銘柄が92%を占めた。1尾で初ガツオの4～8尾分もあるサイズで、一人では揚げるできないので、二人がかり釣る。このサイズは昨年以前に日本近海に來遊し、産卵のために小笠原水域に滞留している群である。3～4kg以上のカツオは、房総半島東方の黒潮続流域付近まで北上した後、産卵のためにUターンして南下してしまい、三陸沖までは北上しない。三陸沖まで北上するのは、未成熟の2kg級以下のカツオである。三陸沖まで北上して餌を食べて3～4kg前後に成長し、産卵できる体（戻りガツオ・下りガツオ）になってから小笠原諸島以南の海域に南下して産卵する。

現在、小笠原諸島で漁獲されているカツオは、1.3～2.1kg級の「小々」銘柄・「小」銘柄の漁獲は非常に少ない。近年、日本近海に來遊する主群であった、小笠原諸島～伊豆諸島を北上する群は、今年は少なそうである。

一方、南西諸島水域（屋久島）で操業し、鹿児島・宮崎等に水揚げしているカツオ竿釣り船は、現在、1～2kg台のカツオも中心に漁獲しているおり、今年は4月中旬現在で前年並みの漁獲量（1500トン前後）で推移している。なお、鹿児島では年間4500～8500トンの水揚げがあり、4～7月に水揚げが多い。小笠原～伊豆諸島の漁が悪いことから、築地市場では今月は鹿児島・宮崎の1kg台・2kg台が入荷の主体であった。熊本地震発生以降、高速道が使えないなど道路事情が悪いことから、一部航空便も使用して築地などの遠方に送っている。

図8 鹿児島における生鮮カツオの水揚げ量の推移



以上のようなことから、今期の伊豆諸島海域～房総半島沖への1.5～2kg級の「初ガツオ」の來遊は、小笠原諸島～伊豆諸島水域を北上する群は今年も少なく、日本近海への來遊量自体は少ないかもしれない。5月になり、伊豆諸島～房総沖～黒潮続流域で漁獲される群は、昨年・一昨年同様に南西諸島から黒潮を通して北上する群で、漁獲量は少ないかもしれないが主体となると思われる。

5. 昨年のカツオ漁を振り返って

昨年のカツオ漁は1月中旬～4月中旬まで小笠原諸島南部海域で、6～12kg級の特特大を主体に漁獲した。4月下旬にようやく1.5～2kg級の初カツオの群が伊豆諸島～房総半島沖に来遊し、5月上旬に一時的に好調な漁獲がみられた。この時期は大中型まき網がカツオを主体に漁獲し、中型竿釣り船は例年通りビンナガ主体の漁獲を行った。お盆過ぎには大中小型まき網のカツオ漁も切れ、竿釣りのビンナガ漁も切れた。このため、まき網は網を替えてイワシサバ漁に切り替え、竿釣りはカツオ漁に戻ったものの、8月後半以降群も薄く低調なまま漁期終盤を迎え、2年続きで例年より1ヶ月早い10月中旬には群が見つからず終漁となっている。漁期終盤の航海は、2年続きで1航海当たり数十～数百kgの水揚量、数千円～数万円の水揚金額という赤字操業が続いており、日本近海への来遊量自体が先細っているのかもしれない。

6. 竿釣りビンナガ漁は？

中型竿釣り船によるビンナガ漁は、5～7月に黒潮続流域付近で行われ、缶詰原料や輸出向けとなることから相場がキロ300円前後で安定しており、全船で1万数千トン漁獲することからこの時期の竿釣り船の重要な収入源となっている。ちなみにこの時期は、カツオ・マグロ狙いの大中小型まき網船がカツオ主体に漁獲し、中型竿釣り船は量で稼げるビンナガ漁を行うことから漁場も南北に別れる。竿釣りビンナガ漁の予測材料となっているのが、紀伊勝浦の小型延縄によるビンナガの3月中の漁獲状況で、小型延縄船のこの時期の主漁場である紀南礁にいる群が房総半島東方の黒潮続流域に移動するため、年令毎の漁獲量を算出して漁況予測を行う。今年の3月のビンナガの漁獲量は610トンで、過去5年間で最低であった。前年同月・過去5年平均のともに半分以下と今期のビンナガ漁もカツオ漁ともども厳しそうである。

